



ちぐさ

CHIGUSA

戸板女子短期大学同窓会千草会

Vol. 66

校訓

知 好 楽

子曰く

之を知る者は

之を好む者に如かず

之を好む者は

之を楽しむ者に如かず

論語（雍也第六）

校訓 知 好 楽

ものごとはすべて対象を「知る」ことから始まる。「知る」ことによって「好き」になれる。対象を知って好きになり、はじめて人は「楽しみ」ながらその本質をつかむことができる。

『戸板学園百周年記念誌』より

CHIGUSA

Vol.
66

ちぐさ

戸板女子短期大学同窓会千草会

目次

表紙絵 七宝焼き「遠来」 被服科15回 岡田 一栄
表紙 (2) 校訓 知好楽

- 2 ご挨拶 コロナ禍における千草会の運営について
会長 小林 操子
- 3 創立120周年の歴史を未来に繋ぐ使命 ―感謝を胸に―
学長 小林 千春
- 4 健康寿命を少しでも延ばすために 総合教養科元教授 中島 悦子
- 5 変化にとんだ6年間の思い出 食物栄養科元教授 肥後 温子
- 6 本物を見たことはなくても 服飾芸術科講師 丸山 喬平

人物紹介

- 7 自利利他の精神で、自分と他者を大切に
被服科44回 石井亜由美
- 8 子どもたちが教えてくれること 生活科48回 上田 恒子

広がる輪

- 9 お便りコーナー
今だからこそ 被服科41回 太田 佳子
戸板と私とこれから 被服科48回 中植 優子
人との繋がりを大切に 食物栄養科11回 川瀬 仁美
誇りを持っている私の仕事 食物栄養科15回 森 悠菜
懐かしの寮生活 英文科32回 渡部 雅子
「福祉」を通して 英文科47回 日向 美帆
- 12 戸板栄養士会だより
千草会支部紹介

かんたんレシピ

- 13 楽々おやつ Vol.4 食物栄養科5回 井上 慶子

学園だより

- 14 学生生活
- 16 TOITA Fes 2021を終えて

会務報告

- 17 行事報告・会計報告・奨学生
- 20 悼む・永眠者
表紙 (3) 入試・広報部からのお知らせ

表紙



七宝焼ペンダント
「遠来」

・七宝焼

七宝焼は金属とガラスの合体工芸の一種で、金属を素地にした焼物です。金属地に釉薬を800度前後の高温で焼成することによって、融けた釉薬によるガラス様あるいはエナメル様の美しい彩色を施します。

このペンダントは大きめのサイズで、身に着けるというよりは、展示会用として制作したものです。自宅で育てたランの花が咲きその感動を表現、立体感を出しました。銀粘土も使用。七宝焼作品展で入賞したものです。

裏表紙



アートクレイシルバー
ペンダント

・アートクレイシルバー

アートクレイシルバーは純銀の微粉末と水、バインダー(結合材)で構成されている銀粘土です。自由にカタチを作ることができ、焼くと純銀に変わります。美しい天然石を入れた作品を作りたいと思い、トパーズを入れて創作しました。

参考資料

・<https://ja.m.wikipedia.org/>
・<https://www.artclay.co.jp/>

被服科15回
岡田 一栄



千草会会長
小林 操子

千草会会員の皆様には、お変わりなく健やかに過ごされたことと拝察申し上げます。平素は、同窓会千草会のためにご支援・ご協力を賜りまして心より御礼申し上げます。

昨年(二〇二〇年)の一月より始まった新型コロナウイルス感染症の拡大は、年を越えて今年(二〇二一年)になっても収束されず、はや年末を迎えようとしております。ワクチン接種や薬の開発も進みましたが、日本だけでなく世界でもその脅威は衰えず、あらゆる生活のなかにその制約を受け続けております。

千草会の運営にも影響は大きく、対面での会議は六月末に常任幹事会の開催が一回できたのが現状でした。そのようななかでも幹事の皆様には予算や決算などの重要事項を、常任幹事の方々には必要な審議事項を郵送やメールを中心にして連絡を取り合い、会の運営を止めることなく進められましたことに感謝いたしております。



ご挨拶

コロナ禍における千草会の運営について

今年度は二年任期の幹事改選の年となりました。二月に旧幹事の皆様に継続のお願いのハガキを送らせていただき、百八十六名の方より承諾のお返事をいただきました。また新たに幹事となられた八名をお迎えし、今期百九十四名でスタートいたしました。大変心強く、感謝申し上げます。また、幹事改選とともに常任幹事も改選となり、新しく四名の方が加わり継続の常任幹事と合わせますと十八名になりました。近年、改選の度に常任幹事数は減少するばかりでしたので、新任の方々の活躍が、大きな活動力となることに期待しております。詳しくは十七、十八ページの役員紹介欄に記載しておりますので、ご確認いただきたいと存じます。また、会長には引き続き私が就くことになりました。前会長の鈴木静子先生より引き継いで三期目となりました。力不足ではございますが、皆様のご協力をいただきながら誠実に努めてまいりたいと思っております。どうぞ

よろしくお願い申し上げます。

さて、前号で皆様とお約束しておりました千草会総会は、本来の計画ですと二〇二二年に開催する予定でありました。しかし、コロナ禍の影響で大人数での集まりは難しく、また、一年前の幹事会で承認を得る必要がございます。先の見えない状況のなか、幹事の皆様への議案としてお諮りすることはできませんでした。この原稿を書いている現在(二〇二一年十一月)、感染者数は減少しているとはいえ、やはり予測は難しく、開催を断念するしかありませんでした。二〇二二年は戸板学園創立百二十周年を迎えるなかでの開催になります。私なりに同窓生として年代や学科を超えた交流の場をと、あれこれ夢を描いておりましたので、とても残念な気持ちであります。開催できるのは二年先か、三年先かわかりませんが、戸板女子短期大学の卒業生として集い、ともに思い出せる日を心より願っております。

『ちぐさ』六十六号についてもその影響は同じでした。編集委員八名が同窓会室に集まって会議をするには狭く密になり過ぎます。一時は休刊も検討いたしました。『ちぐさ』を心待ちにしてください。同窓生の元にもどうしてもお届けしたく、編集会議の人数やページ数を減らすなど、昨年同様に工夫いたしました。今は無事発刊できまことに安堵しております。

毎年『ちぐさ』の原稿を書き始める今頃になると、その年の出来事を思い出します。年を重ねるごとに時間の流れは速くなり、一日が、一週間が、一ヶ月がと、何かをゆっくりと考える余裕もなく過ぎてゆきます。いや、時間の余裕はたつぷりとあるのですが、気持ちと体がついていけないのが現実かもしれません。賛否両論のなかで開催された一年遅れの東京オリンピック・パラリンピックは、今は遠い日のように感じております。

同窓会千草会が発展していくためにも、若い方々のお力をいただきたいと念じております。

これからも同窓会千草会へのご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。皆様日々の生活を穏やかに過ごされますようお願いいたします。

(被服科十八回)



学長
小林 千春



創立百二十周年の 歴史を未来に繋ぐ使命

— 感謝を胸に —

千草会の皆様、お変わりなくお元氣にお過ごしでしょうか。昨年来、新型コロナウイルス感染症に日常生活が脅かされ、さぞご不安の日々をお過ごしでいらしたかと存じます。改めまして、平素から本学の教育に温かいご理解、ご支援をいただき厚く御礼申し上げます。

現在のところ、緊急事態宣言も解除され、感染状況も収まり、日常生活に戻りつつありますが、南アフリカで発見されたオミクロン変異株が瞬く間に欧州、香港、オーストラリアなど世界四十五ヶ国に広がり、再び日本国内で感染が拡大することも懸念されております。このコロナ禍で、本学の学びの状況も平常とは大きく変わりました。昨年引き続き、四月からの授業は原則ハイブリッド型、対面授業とオンライン授業で行いました。昨年考案したノウハウもありましたので、滞りなく授業を進めることができましたが、感染が拡大し緊急事態宣言が発出されるたび、急遽すべてオンライン授業に切り替える措置をとるなど、先生方には大変なご苦勞をおかけいたしました。

たし、学生には通学できないという厳しく悲しい状況をもたらすことになりました。

今年度の卒業生たちは、緊急事態宣言の発出前で、入学式を行うことも出来ませんでした。登校できない時期もあり、通常の学生生活を送ることもできない非常に厳しい学生生活を送ることになってしまいました。このような学生の状況下、本学では、いかに「コロナ禍での学びの継続」を行うかを念頭に、産官学連携やクラブ活動、そして大学祭「TOITA Fes 2021」などの正課外活動に取り組みました。

十一月十四日に開催した「TOITA Fes 2021」では、幸い東京の感染状況が収まりつつある状況であったこと、多くの教職員、学生たちのワクチン接種の完了もあり、感染対策を十分に施しながら、人数を制限した形にはなりましたが、有観客で行うことができました。ワクチン接種に関しては、校医の菅沼三田診療所、菅沼先生のご尽力により、本学の教職員、学生たちも慶應義塾大学でワクチン接種をしていただきました。このワクチン接種が、インターシッピングや

産官学連携などの活動へと学生の活躍の幅を広げる大きな助けになったことは言うまでもありません。ワクチン接種に関して、多大なご尽力をいただきました。菅沼三田診療所の院長先生、副院長先生に心から感謝致しております。

学生募集に関しては、オープンキャンパスも参加人数の制約を設けた予約制をとるなど、昨年同様、通常形態での開催はできませんでしたが、多くの短期大学が厳しい学生募集にある中、本学は今年度も総合型選抜(旧AO入試)、推薦型選抜も順調であり、無事定員以上を確保することができました。

さて、私が学長職を拜命してからはや六年が過ぎようとしています。就任当初より目指して参りました「戸板ブランド」構築の輪郭がくつきりと浮かび上がり、創立百十五年を記念して策定した「Toita's 7Promises」が、学生の中に浸透してきたことを日々感じる事ができます。ことを大変嬉しく感じております。それは、「Curiosity」に繋がる産官学連携プロジェクトやインターシッピングなどへの意欲的な参加、そして、「Sharing」の体現とも

見える「TOITA Fes 2021」で見られた学年や学科を超えた学生たちの協力体制の姿にはつきりと現れておりました。また「Sincerity」にあります「誠意を持つて最後までやり遂げる姿勢」は、多くの四年制大学において、コロナ禍の影響もあり、退学する学生が激増している状況にも関わらず、本学では、反対に退学者がかなり減り、勉学を最後までやり遂げる学生が増えていることから見えて参りました。

残念ながら、コロナ禍により、日本の経済力にも大きな翳りが出ています。学生たちの就職も、航空会社やアパレル関連会社の採用停止により苦境に立たされているのも現実です。また、短期大学全体に対する世の中の流れは依然逆風と言えます。これから本学の進む道も決して平坦ではないと思います。

しかしながら、本学が百二十年を迎えようとする今、決して忘れてはいけないことは、戸板関子先生が本学を創立した時の思いです。建学の精神である「時代に適応した自立した女性」を育成することです。すなわち、時代の流れを敏感に受け止め本学の歴史を繋いでいくこと、これがそが学長としての使命だと私は信じております。最後に申し上げますが、六年にわたる支えてくださいました教職員の皆様に心から感謝しております。そして近くであるいは遠方から、温かくご支援いただきました同窓会千草会の皆様に厚く御礼申し上げます。皆様の「健康、ご多幸を心よりお祈り申し上げます。



総合教養科 元教授
中島 悦子



健康寿命を 少しでも延ばすために

戸板学園創立百二十周年おめでとうございます。謹んでお祝い申し上げます。

私は体育大学を卒業後、戸板女子短期大学に勤務し、助手を経て体育の教員として二十三年間在職しておりました。当初、体育は必修科目であったため、三学科の全学生が受講していました。三田校舎での講義は学内、実技(ゴルフ、アーチェリー、テニス、登山、スキー等)は学外で実習を行っていました。様々な種目をこなし大変でしたが、楽しい思い出として残っています。その後は、大学での環境やカリキュラム等が変わり、体育の授業は選択科目になりました。現在の校舎ができてからは戸板ホールで実技(エアロビクス、卓球、バドミントン、ソフトバレー等)を行い、講義は「健康学」を担当していました。健康を維持増進させるためには何が必要で、学生にとってどのようなしたら自分の問題として捉えられるのか、手軽に実践できるようなものか、常に考えていたことを覚えています。退職後はかねがね考えていた

「健康教室」を開くことが夢で、落ち着いたら開業したいと思っていました。しかし、退職をして半年後に父が認知症と診断され、その頃から介護が始まりました。母は十数年前に先立っており、父は一人暮らしでしたので、ヘルパーさんに訪問介護を依頼していました。が、私も常に実家に足を運び、寝泊りすることも多くありました。認知症については私なりに理解していたつもりでしたが、なかなか大変で人には感情があるので、お互いにイライラしていたり、父の感情を受け止めようとしても、それができない時もありました。父の場合、不安が募ると豹変してしまい、普段は温厚でしたが、こんなにも変わってしまったのかとショックでもあり、悲しくもありました。ある時からは父に寄り添い、父の言うことに合わせ、私自身が演じるように徹するよう心がけました。常に父を気分の良い状態にしてあげることが、穏やかな気持ちを保てるのだと確信したからです。しかしこのような対応をするためには、もの凄くエネルギー

が必要で、私自身疲労困憊になることも多々ありました。この経験を通して、少しでも健康的な生活を送って、家族や周りの人に迷惑をかけず長生きできればと思います。今はコロナ禍で、感染予防として免疫力を高めるために、運動や栄養面に気遣って生活を送っている人も多いと思います。私もその一人です。免疫力は加齢とともに低下していくと言われています。加齢で免疫細胞の数が減っていくことで、ウイルスへの抵抗力が弱まったり、また自律神経の乱れも免疫力が低下していく要因になるようです。適度な運動を続け、自律神経のバランスを整え、そして自身の体と向き合いメンテナンスをして、少しでも健康寿命を延ばすことができたら最高だと思えます。



健康教室風景

しています。また、今注目されている「プチ断食(オートファジーの活性化)」にもチャレンジしています。健康法もさまざまなものがありますが、人によって合うものもあれば合わないものもあります。正しい情報を得ながら自分に合った方法を見つけていることが重要だと思います。昨年の秋から退職後に叶えたかった夢「シニアのための健康教室」を始めました。体を動かす心地よさを実感してもらい、また良い姿勢を心がける大切さを伝え、運動の必要性、重要性はもちろん、健康に繋げられる情報や具体的な方法等を推奨できたらと思っています。少しでも健康寿命を延ばし、楽しく過ごしていただくためのお手伝いができたら幸いです。最後にありますが、戸板学園のより一層の発展と教職員・同窓生の皆様のご健康をお祈りいたします。



食物栄養科 元教授
肥後 温子

私が戸板女子短期大学に勤務したのは、平成十一年（一九九九年）から十七年（二〇〇五年）までの六年間でした。その割に長く感じるのは、大学の変革が最も大きい時期に勤務したからではないかと思えます。

まず「生活科」だった学科名が、勤務した翌年（二〇〇〇年）には「食物栄養科」に名称変更しました。また、平成十六年（二〇〇四年）には勤務地が自然豊かな八王子校舎から都心の港区にある三田校舎に移転したのです。

戸板に就職した時の私の年齢は五十四歳でしたが、専任教員としての就職は初めてでした。では、それまで何をやってきたかを説明しておきましょう。

いくつかの大学で非常勤講師をしながら、共同研究の形で青山学院女子短期大学と共立女子大学に研究の場を借りて、「電子レンジ（マイクロ波）の加熱特性」の研究をしていました。電子レンジの熱源であるマイクロ波加熱法は、従来の加熱法（熱伝導加熱法）と異なるスピード加熱特性や内部加熱特



変化にとんだ 六年間の思い出

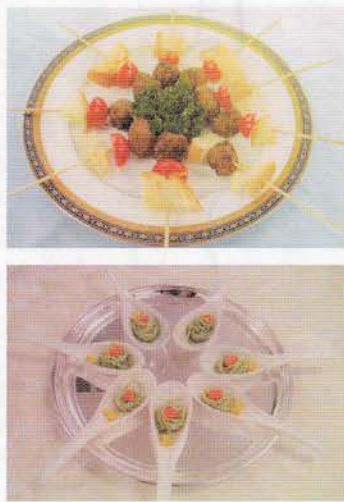
性を発揮します。デンブン性食品を硬化させたり、卵を破裂させる原因ともなりますが、マイクロ波を食品加工に利用すると、短時間でタンパク性練生地を膨化乾燥したり、包装材料と加熱殺菌できるなどの画期的な能力を発揮します。サーモグラフィで昇温特性を調べたところ、食品の水分や塩分濃度に影響されて、加熱されやすい部位が変化し、含水率の低い食品の方が昇温しやすく、硬化現象や膨化現象などの物性変化を誘発しやすいことがわかりました。マイクロ波加熱特有の加熱特性は研究テーマとして面白いだけでなく、話題性もあつたためでしょう。

執筆や講演依頼が多く、本を出すことも、博士号をとることもできました。特に、平成元年（一九八九年）から六年間、全国の高校の先生に『電子レンジ』の夏季講習を担当するため、北海道から九州まで足を運んだことが印象に残っています。

戸板に勤務した頃にはマイクロ波加熱の研究は一段落していましたが、電子レンジの取材でテレビ

局が来校し、学生を集めてビデオ撮りしたことがありました。内容は覚えていませんが、いつもは勉強に熱心でない学生が争って最前列に並び、われ先に発言しようとするのに驚いた経験があります。学園祭やオープンキャンパスなどのイベントや、クラブ活動もさかんでした。私は調理学やフードスペシャリスト科目を担当しており、前任者の後を継いで「野草研究クラブ」を引き受けていたので、イベント時には来校者のために軽食を用意したり（写真）、テーブルセッティングをしたり、模擬店を出したりと忙しかったことを思い出します。

教職員の方々との親睦会もさか



当時の八王子校舎の風景

んでした。知見を拡げるために、お金を積み立ててすばらしい料亭やレストランに食事会に行つたことが何度かありました。特に印象的だったのは、八王子校舎の八重桜の下での花見会でした。竹やぶがあつたのでしようか。花見会のために持つて来ていただいた筍を煮たり、飲み物を冷やしたりして接待役をつとめていたのでよく覚えていきます。

栄養士会では卒業生達から実体験に基づく情報を具体的に聞くことができ、在学生だけでなく、管理栄養士である私にとつてもたいへん参考になりました。

退職後、文教大学に十年間勤務しました。加熱調理機器の研究で学会賞をいただいたり、また『キッチングッズの本』や『電子レンジの実験・実習書』を出版することができたことを、お伝えしておきます。

『ちゅんさ』の原稿依頼をいただいたおかげで、戸板時代の思い出がよみがえりました。



服飾芸術科 講師
丸山 喬平



本物を 見たことはなくても

この度、同窓会誌に寄稿させていただくことになりまして、拙文ながら重ねさせていただきます。

ファッションと芸術の関係性を探る中で、人間の活動の可能性を広げる何かを探せないだろうか？ 研究と教育に携わっております。作品制作と発表を通じ考えや経験を発展させていきたいと感じています。ですが、そういった活動をやる中で非常に重要なのが、先輩や後輩、友人たちの存在です。

父が石材の彫刻をしていたということもあり、私も東京芸術大学の学生時代に石を始め様々な素材で立体作品を制作してきました。重い素材は移動させることが一人では難しいものもあり、そういった時は嫌でも誰かと協力して作業する必要があります。こういった単純な物理的問題から、誰かしらと協力する場面があるというのもそうなのですが、絵画にしろ彫刻にしろ、ファッションも、色や形で表されるものは言葉に置き換えづらいものもあります。同

じような手段を通じて感覚や価値観を共有できる仲間と出会うことができたのは、学生時代において最も重要なことといえると思っています。

この文章を書いている今現在、コロナウイルスの感染拡大状況は幾分か収まっているように感じるものの、新しい変異ウイルスの感染が始まっていたり、先がわからない状況で在宅でのオンラインの受講と短大での対面の受講半分ずつのハイブリッド形式にて授業が進められています。私が学生の時代にも、このような状況が起こっていたら、果たして友人関係など築くことができたのだろうかとも考えつつ、今は今でとにかくできることをやっていくしかないという業務についています。

心配はよそに、学生の中には今のハイブリッド形式の方が授業を受けやすいからいいと話す学生もおり、今の状況なりに前向きに活動している学生が多く、新しい授業のシステムの難しさや、学生の

たくましさも感じたりします。教員側からすると、人（学生）の印象を覚えるのには顔の印象は大きいのですが、短大で会うときはマスクで顔が半分隠れていて、顔がすべて見えるときはほぼZoomなどネット越しの形になります。ネット越しはやや画面や音声にノイズが入ったりもするので、はっきりとした印象がわかりづらい。ハイブリッド形式と以前のようにすべて教室で行っていた状態とで、どちらがやりやすいかは一概には言えないのですが、「誰に話しているのか」がしまいちイメージしづらいところが少しあるので

話が少し変わりますが、私はミケランジェロなどの作家の作品がとても好きなのですが、お恥ずかしい話海外に行ったことがないので本物を見たことがないのです。写真やレプリカで見た自分の勝手なイメージで好きになっていくだけじゃなかろうか、これは本当に作品そのものと向き合っていると

いえるのでしょうか。
ただ、作品はそれが生まれるに至った経緯やテーマ、モチーフの組み合わせに意味があるものも多く、ミケランジェロの作ったものは多くがキリスト教を題材にしたもので、当時の人々の信仰や、生きる希望の糧となることを目指したものです。仮に私がイタリアに住んでいて、風景になじんだ作品を見ていたらそういった事実から向き合うことは無かったかもしれません。これは、私が作品を知ったきっかけとなった本やらなんやらを書いてくれた方が、その作品の重要性を理解し、それを伝えようとしてくれたおかげで、私はそれを知ることができたのです。知れることに対する感謝はやはり大事です。

人とのコミュニケーションも、自分と接点を持つ人間がスマートフォンやPCの向こうにいたりとかかること自体、かなり有難いことです。このシステムの中で生活できることにまずは感謝しなければと、Zoomを使うときのことを振り返り、今思いました。その時々で人を取り巻く環境は変わり続け、そのたび不満や不安も出てくるとは思いますが、すでに何かしら恵まれているということを忘れずに、私の場合は表現についての研究やなんやらかんやらを続けていければと思います。

自利利他の精神で、 自分と他者を大切にする



被服科44回

石井 亜由美

はじめに、戸板女子短期大学の先生方、千草会の皆様方、このような機会をいただきまして、心より感謝を申し上げます。

私は高校・短大とも戸板で、楽しく実りある学生生活を送りました。短大の時に出逢った友人たちとの絆は今でも深く結ばれていて「トイタース」という「TOTO」のグループで、自然災害や病氣、悩み相談などお互いにいたわり合いながら、交流が続いています。

短大の被服科では生活工芸クラスで学び、その中で「色彩論」も履修しました。学んだことが今でも活かされています。現在私はカラーセラピスト・心の旅研究家、東洋大学国際観光学部非常勤講師として活動しています。

短大卒業後すぐに結婚し、色彩の専門学校に通いました。その後、英国の民間のカラーセラピストの資格を取得し、二〇〇四年からカラーセラピストをしています。色彩や旅に関する本を七冊出版したり、全国で講演会や研修、大学や専門学校での講師、テレビや執筆活動、世界遺産の「長崎・天草の潜伏キリシタン関連施設」など観光地のイメージカラーの作成、個人向けにパーソナルカラー診断&骨格診断を行ったりしています。

四十二歳で東洋大学国際観光学部の大学院に入り「グリーンセラ

ピーとしての巡礼」という、人の悲しみや喪失感を癒やす巡礼について、四国八十八か所をテーマに論文を執筆し、修士号を取得しました。

今は、東洋大学国際観光学部の「リラクゼーション・ホスピタリティ」という授業にて「観光ビジネスに活かす色彩やアロマテラピー」「カラーコーディネート・パーソナルカラー」「ストレステア」「人の心を救う観光」について、外面と内面を磨くことをお伝えしています。その前は国立大学法人の和歌山大学で講師をし、最近は母校の戸板の国際コミュニケーションシヨン学科准教授木内伸樹先生のご紹介で、二〇二〇年と二〇二一年の秋に特別講義として「ツーリズム・スタディーズA」で「観光ビジネスと色彩」について、お話をさせていただきました。

短大卒業後、作家・遠藤周作氏の『深い河』という小説に出会い、私にとっては心の世界に関心を持つことができた、人生のターニングポイントでした。『深い河』は、インドの聖地ベナレスにあるガンジス河へ巡礼する日本人の人生と愛について書かれた作品です。

それからの私は「色彩と心の世界」をもっと深めて学んでいきたいという気持ちが強くなり、このことは戸板の「知・好・楽」の校訓が、

私の心の奥底に刻み込まれていたことが大きいと思っています。

好きな言葉に、仏教用語の「自利利他」があります。「人の幸せになるような行動をすることが、自分自身に実りとして返ってくる」という意味です。もう一つ大切なことは、自分を愛し満たしていれば、他者を幸せにしていくことができるということも、意味合いとしてはあるのではないかと思っています。

私は日本国際観光学会にて、精神性の高い観光の部会や自分自身において「精神性の高い観光」という「人の心を救う観光」について研究しています。生涯現役で「人の悲しみに敏感になれること、人の苦を和らげる方法」について研究し、お伝えしていきたいです。



東洋大学での授業風景

子どもたちが教えてくれること

生活科48回

上田 恒子



はじめにこのような機会をいただきましてことを感謝申し上げます。戸板女子短期大学を卒業してから早いもので二十年以上が経ちました。高校生の頃から子どもたちの食事に興味があり、一年の春休みに保育園実習に参加したことでますます魅力を感じ、保育園栄養士になりたいと思いました。

卒業後は渋谷区にある社会福祉法人の保育園に就職をしました。当時、園には先輩栄養士が嘱託での在籍で週一回の出勤だったため、園の流れや年間の行事については、一緒に業務だった五十代の調理師の先生二人に教えてもらいました。園長先生に「栄養士は調理師に育てられる」と言われたのが今となってはとても実感する言葉です。栄養士になり八年目の時に、世田谷区の民営化に勤務先の保育園が手を挙げるといふ話があり、応募のために必要な給食分野の資料作りや説明会への参加など目まぐるしい日々を送りました。民営化が決まってから準備期間とされていた一年間は、度々民営化先の調理室と一緒に入り公立のやり方を学びました。完全アウエーに一人で挑まなければならぬ状況が今思い出しても辛い日々でした。書類関係でも渋谷区と世田谷区では行政の違いにより難しかったです。民営化園の立ち上げはとても難し

い作業でしたが、公立のやり方や考え方を知ることができたのは、とても良い経験になりました。

現在も同じ保育園で業務をしていますが、場所や環境が変わっても働き続けられているのは「自分の作ったものを実際に子どもが食べて、その様子を見て、ダイレクトに感想をもらえる」ということに面白さを感じているからだと思っています。昼食やおやつ共に数時間で答えが出るのでおいしいものはよく食べ、味や組み合わせがイマイチだと思う物は残渣が多く、残渣が多かったらなぜ残ったのか、毎食残渣ボウルの中も分析し、次の献立に繋げていく毎日です。

子どもたちの成長を感じながら仕事ができるのも楽しさのひとつです。小さい頃は野菜が苦手だった子も年齢を重ねるごとに食べられるようになったり、また一貫して苦手な物は卒園まで苦手という子もいたり……食への興味や食欲は様々。毎年五歳クラスの子たちに「卒園するまでに食べたいメニューを教えてください」と一人ひとりに聞き、一月からリクエストメニューを組み込んでいます。食が細かい子や興味が薄い子でも食べたいメニューは言えるので必ず取り入れていきます。「自分の好きな物をお友達と一緒に食べておいしかった」が少しでも記憶に残って

くれたらいいなと思っています。嬉しいことに卒業しても戸板のご縁は途切れることなく、学外実習の受け入れや栄養士実践演習、戸板栄養士会などへ参加しております。学外実習では調理室の作業だけでなく「保育園」を知るためにも、各クラスの喫食巡回を行っています。子どもを感じることで食育の大切さを知って欲しいと思っています。また、年一回行われている栄養士実践演習の保育園分野においても、子どもたちへの食育や食物アレルギーのことも含め話をしています。

戸板栄養士会においては、ご活躍されている諸先生方にご指導賜りながら、在学生や卒業して間もない方々に、微力ながらお力になれば幸いです。



保育園の昼食

ただからこそ

被服科 四十二回

太田 佳子

戸板女子高等学校から被服科教職クラスに進み、平成三年に私立大学の事務職員のご縁をいただき、今年で勤続三十一年目に突入しました。これが私の略歴となります。これまででありがたいことに、人には恵まれ、多くのことを学ばせていただき、現在に至っております。

大学事務と聞いて、「実際のところ何しているの？」とお思いの方もおられると思います。で、コロナ禍での大学生の様子と併せて大学事務の仕事を紹介させていただきます。

現在は学生支援の部署で、主に奨学金、サークルや学園祭の支援、学生相談などの窓口業務に従事しています。過去には成績や学籍を扱う教務や一般企業にもある人事業務にも携わりましたが、現在の学生支援は、授業以外の学生生活全般を担当する部署で、学校特有の部署と言えます。学生の救急搬送があれば救急車にも同乗し、学生同士や親子間トラブルの相談も受けますので、学生のパーソナルな部分にも触れ、サポートをする業務です。



並木道のキャンパス内

さて、新型コロナで皆様も生活が一変されたと思います。大学生も多分に漏れずの状況です。奨学金申請数は確実に増え、家計急変の相談も大変多いです。中高生よりも行動範囲が広い大学生は、授業やサークル活動も規制がかかりオンラインとなり、長期間にわたり自粛が求められまし

た。理想の大学生活との差に悩む学生も多く、コロナ禍でも、自分たちに今できることは何かを常に模索していました。オンライン学園祭などの企画書をいち早く目に見えるのは、学生支援という部署ならではです。模索し奮闘する姿を見てみると、これからの世の中を担うのはこの学生達なのだと思えることができます。

かくいう私は学生の頃、学生会に所属し、学園祭などで学生課(現学生部)にお世話になりました。今この職に就いているからこそ、わかることが多々あります。改めて当時の学生課の皆様にご挨拶を申し上げ、充実した学生生活を過ごさせていただき、本当にありがとうございます。

また、今回このような機会を与えていただいたことに、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

戸板と私とこれから

被服科 四十八回

中植 優子

私のルーツを語る上で、戸板学園はなくてはならない存在です。

私の祖母は芝地区で生まれ育ち、百年近く前に戸板裁縫学校に通っていた卒業生です。戸板がなければまた別の人生を歩んで、私は今存在していなかったかもしれません。祖母が通っていた当時は、創立者である戸板関子先生がいらっしゃった時代です。その学校に自分も通ったというのは、とても感慨深いものがあります。

今年百二十年を迎えた戸板学園、歴史が長いという代々戸板学園の卒業生もいらっしゃるかもしれません。母校が存続する大切さを身をもって感じていきます。

私自身は戸板短大を卒業後、一般企業に就職

しました。その後、縁があつて、当時小野一成先生が科長でいらした総合養料科の助手として採用していただきました。現在は短大事務局に勤務しております。

現在コロナ禍により、短大では通常登校による授業とオンライン授業を半数に分けて実施しています。我が家の小学生にも、文科省のGIGAスクール構想による一人一台端末の給付が前倒しで配布され、分散登校による自宅学習の際、実験的にオンライン授業が実施されました。先日そのiPadで回線が切断されたため、私が設定を試みようとしたところ、子供が指でささつとスライドをして、簡単に接続してしまいました。「あ、そんな簡単にできるのね」子供に教えるどころか、私が教えられる状況です。

このような時代に育った今の子供達が社会に出る頃には、私達の時代とは変わり、AIによるオートメーション化で、なくなる仕事もあれば、新たに創出される仕事もあり、今当たり前のことが通用しない世の中になっているでしょう。私も時代に取り残されないように、そして不安にばかり思うのではなく、どんな世の中になるのか楽しみながら進んでいきたいと思えます。

人との繋がりを大切に

食物栄養科 十一回

川瀬 仁美

戸板女子短期大学を卒業し、早いもので十年になります。卒業後は、保育園で栄養士として現場で経験を積み、現在はご縁があり、食物栄養科の助手として働いています。

私が助手として働きつかけとなったのは、学生時代、そして卒業してからもお世話になっていた先生から「助手として学生の授業サポー



懐かしの寮生活

英文科三十二回

渡部 雅子

昭和五十四年三月に高校を卒業し、四月に短大生になって、同時に寮生になりました。寮生活では初めてのことが色々ありました。懐かしい寮生活のことを改めて思い起こしてみます。

まず思い出されるのは食事のことです。納豆を初めて食べたのが寮の食堂でした。上京前は食卓に納豆が出た記憶がありません。父が食べなかつたからです。今思うと納豆の存在すら知っていたかどうかはつきりしません。先入観が無かつたからか美味しく食べることができましたし、十八歳で納豆を食べ始めたのは有り難いことだと思っています。

次は銭湯の思い出です。寮は当時の三田校舎の裏手、戦火を免れた一帯と聞いたことがあります。少し歩けば有名企業の社屋や、日本の教科書に載るような史跡のある街の中に銭湯がありました。寮から数分のところへです。初めて銭湯へ行ったのは一年生の夏休みに入る頃でした。寮生は帰省するので休みに入ると寮のお風呂はお休みで、用事で寮に残ったときには銭湯へ行ったものでした。冬場、寮のお風呂にお湯が入らない日は、何人かと連れ



だつて銭湯へ向かいました。湯冷めしないように、帰りは綿入れにマフラーという出で立ち

でした。

思い出される初めてのことがもう一つあります。宝塚歌劇団の観劇です。新入生の歓迎行事で日比谷へ寮生全員で出かけました。最寄りの芝公園駅から日比谷駅はたった三駅でしたので、楽しいことが始まるまでのわくわく感にもっと浸っていたい身としては、もう少しだけ地下鉄に揺られていたい気分でした。華やかなステージは大変見応えがあり、その後、他の芝居を観る良いきっかけになりました。

不安を抱え、窮屈なイメージを持ってスタートした寮生活でしたが、得難い経験の多い二年間でした。

末筆になりましたが、ご指導いただいた先生方、学園の皆様、千草会の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

「福祉」を通して

英文科四十七回

日向 美帆

私は、平成八年度に英文科教職クラスを卒業しました。当時学科長の新井一彦先生、増田節子先生、現学長小林千春先生はじめ諸先生方との縁があり「副手」として研究室で勤務させていただいております。戸板を退職後から現在に至るまで千草会副会長山口順子先生には、大変懇意にさせていただいてございまして、今年度より千草会常任幹事をさせていただくことになりました。

私は昔から教育・福祉に関心がありました。独身時代は教育、結婚から子育ての中の現在は「英語」とは離れて、千葉県の社会福祉法人の障害者支援施設の職員として勤務しております。この施設は主に知的障害、中には精神障害や歩行に介助が必要な身体障

害など、重度の障害を持つ方々が通う「生活介護」という種類の事業所です。

私の業務は事務中心ですが、現場で作業を行う支援員のフォローに入ることもあります。畑での野菜の栽培・収穫、園芸、クルミボタンを使った布雑貨や木材を使った木工製品、クラフトバンドを編んでの小物制作と、一人ひとりの障害の特性にあった創作活動を他の職員と共に、利用者のペースに合わせて行っています。

毎週末には、ショッピングモールで各施設の制作物を「作品展」という形で販売しております。私が勤務している事業所でも畑での収穫物や各種制作した小物の出品をしております。私自身、時間がある時には「作品展」へ足を運ぶことがあります。お客様が商品を手にとってお買い上げいただいている様子を見ると、利用者や職員が一生懸命制作している姿が目に見え、とても嬉しくなります。

身近に「障害を持つ方」がいないと、街中で見かけた時、戸惑うこともあるかと思えます。「人」からではなくても作品展をはじめ「物」を通して、少しでも「障害を持つ方」への関心を持つていただけると幸いです。

先日、何年かぶりに学園祭へ足を運び、新常任幹事の皆様と顔合わせする機会がありました。また教職員の方々とも久しぶりにお目にかかり大変懐かしく、楽しいひと時を過ごしました。



た。今後微力ではございますが、常任幹事の皆様とともに活動してまいりますので、よろしくお願ひ申し上げます。



戸板栄養士会だより



令和三年度も昨年に引き続き、新型コロナウイルスの影響が大きい一年でしたが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。戸板栄養士会も、令和元年度末から活動が思うようにできない状況は続いており、少しずつできることから会をすすめております。ここに、令和二年度末から令和三年度の活動を報告いたします。

【総会】

・令和三年三月十三日(土)

令和二年度戸板栄養士会総会をオンラインにて開催いたしました。同日開催を予定しておりました「食物アレルギーについてのパネルディスカッション」は、残念ながら延期となり、十月十日となりました。

【パネルディスカッション】

・令和三年十月十日(日)

三月に延期となっていた「食物アレルギーについてのパネルディスカッション」をオンラインにて開催いたしました。五人のパネラーからお話を伺い、その後、参加者を含めてフリートークを行いました。短い時間ではありましたが、内容の濃い有意義な時間となりました。

詳細は、本学ホームページの「食物かわらばん」に掲載しています。(＃戸板栄養士会 #食物アレルギー)で検索してみてください。

【TOITA Fes 2021 <参加】

・令和三年十一月十四日(日)

今年のTOITA Fesは、二年ぶりの有観客開催(予約者限定)となり、戸板栄養士会も参加いたしました。十月に開催した「パネルディスカッション」動画の上映と、会員のお仕事を紹介する展示などを行いました。こちらも本学ホームページの「食物かわらばん」に掲載しています。

【幹事会】

偶数月の第一月曜日を定例会議とし、幹事二十二名で運営しております。今年度は、すべてオンライン

ン会議で実施いたしました。

第一回 令和三年四月五日(月) 令和二年度振り返り、令和三年度戸板栄養士会行事予定、幹事名簿について

第二回 令和三年六月七日(月) パネルディスカッション開催について、令和三年度総会、会員へのお知らせについて

第三回 令和三年八月二日(月) パネルディスカッション詳細について、TOITA Fes参加について、広報誌について

第四回 令和三年十月四日(月) TOITA Fesについて、総会について

第五回 令和三年十二月六日(月) TOITA Fes振り返り、総会について、広報誌について

第六回 令和四年二月七日(月) 総会詳細について、広報誌内容確認、次年度の年間行事について

【管理栄養士国家試験対策講座】

今年度は、残念ながら、対策講座の開催は見送られました。

第三十三回管理栄養士国家試験合格者は四名でした。合格された皆様には、心よりお祝い申し上げます。平成十七年度より個人情報保護法の施行により、合格者の個人名は発表されておりませんので、めでたく合格された方々は、ぜひ戸板栄養士会までご一報ください。

【その他】

勤務先・住所・氏名の変更などは必ずご連絡をお願いいたします。また、新しく栄養士業務に就かれた方も会員として登録いたしますので、左記までお知らせください。

〒一〇五・〇〇一四

東京都港区芝二丁目二十一番十七

戸板女子短期大学 戸板栄養士会

TEL 〇三・三四五二・四一六一

Eメール eiyoshi@toita.ac.jp

ホームページ http://www.toita.ac.jp/eiyoshi/

今後の戸板栄養士会の活動については、さらに方法や内容を検討し、会員の皆様と連携をとりながら進めていきたいと考えております。皆様にお役立ていただけるような活動を実施し、より多くの方々にご参加いただきたく、ぜひ会員の皆様からのお声を伺えればと存じます。どうぞいつでも、上記の戸板栄養士会事務局までご意見・ご要望をお寄せください。そして、少しでも早く皆様と直接お目にかかれる日が来ることを切に願っております。

最後になりましたが、皆様のご健勝とご活躍を祈念いたします。

戸板栄養士会事務局 西山 良子

千草会 支部紹介

支部名	支部長	卒業回数
北海道支部	大平 清美 (山下)	生活科 16回
福島県支部	加藤 啓子 (大和田)	生活科 27回
群馬県支部 (連絡先)事務局	北爪 隆江 (原田)	生活科 15回
	近藤 二三枝 (武)	生活科 19回
栃木県支部	直井 和子 (関根)	生活科 18回
	飯島 八壽子 (成田)	英文科 22回
北部九州支部	松尾 寿々子	被服科 14回
宮崎県支部	江藤 博子 (佐藤)	生活科 18回

連絡をお取りになりたい方は、戸板女子短期大学同窓会事務局までご一報ください。



管理栄養士 食物栄養科 5回

井上 慶子

材料 (4人分)

- ・水/アガー 100ml/5g
- ・無調整豆乳 250ml
- ・りんご (アルプスの乙女) 4個
- ※ない場合は紅玉など皮が赤いりんご1個
- ◎水/砂糖 100ml/50g
- ◎しょうがの薄切り 1枚

作り方

【豆花 (トウファ) を作る】

- ① 鍋に水を入れ、アガーを振り入れよく混ぜる。
- ② 中火にかけ、沸騰したら軽くふつふつするくらいの火加減にする。2分ほど加熱してアガーを煮溶かす。
- ③ 無調整豆乳は電子レンジ600Wで2分加熱する。
- ④ ②に、③を2回に分けて加え混ぜる。火をとめ、そのまま常温で固める。(30分ほどで固まる)

【りんごのコンポートシロップを作る】

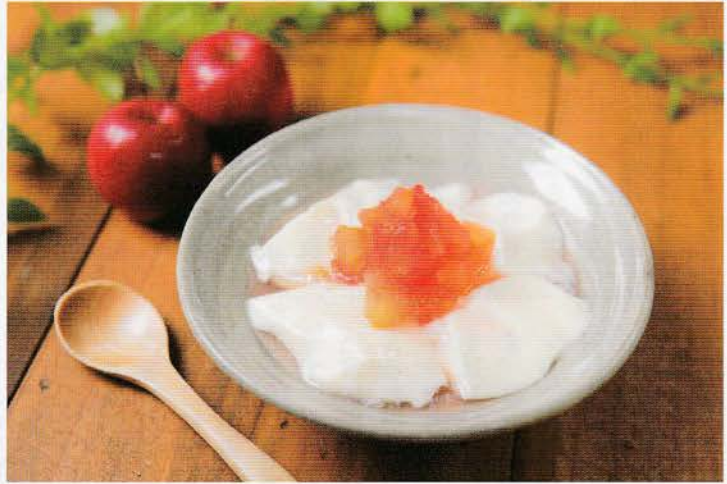
- ① りんごは皮を洗い、4つ切りにする。ヘタと種をとる。
- ② 鍋に①と◎を入れ中火にかける。沸騰したら蓋をして、弱火で10分煮る。冷めたらりんごの皮をとって刻み、鍋に戻す。(盛り付け直前に再加熱する)

【盛り付け】

固まった豆花をスプーンですくって器に入れ、温めたりんごのコンポートとシロップをかける。

りんごのあったか豆花 (トウファ)

～台湾スイーツをアレンジ♪ピンクのシロップがオシャレ～



【栄養成分】 エネルギー 102kcal
たんぱく質 2.3g 脂質 1.4g
炭水化物 21.5g

このレシピは温かい状態でいただくスイーツです。
温めたシロップをかけても溶けにくいよう、アガーという海藻で作られたゼリーの素を使用します。
冷やして食べる場合はゼラチンでも大丈夫です！

じゃが芋のなめらかなティラミス風♪

～じゃが芋を使ってあのティラミスを手軽に再現!～



【栄養成分】 エネルギー 114cal
たんぱく質 1.5g 脂質 5.7g
炭水化物 14.3g

材料 (4人分)

- ・じゃが芋 大1個 (180g)
- ・砂糖 大さじ3
- ◎インスタントコーヒー/お湯 1g/大さじ1
- ・マスカルポーネチーズ 80g
- ・ココアパウダー/ミント 各適量

作り方

- ① じゃが芋は皮をむき、芽をとり8等分に切る。
- ② 鍋に①とかぶるくらいの水を入れ、火にかけて沸騰したら10分茹でる。お湯を切り、しっかりつぶす。
- ③ ◎を合わせる。②に砂糖を加えよく混ぜ、◎を少量ずつ加えなめらかなるように混ぜ合わせる。
- ④ 皿に③とマスカルポーネチーズを盛る。ココアパウダーをふり、ミントを飾る。

ポイント!

今回は、なめらかなアレンジおやつを2品ご紹介!身近な食材で調理工程も簡単です。幅広い世代の方に召し上がっていただけるので、ぜひお家で作ってみてください。

学生生活

二年間の学生生活について

服飾芸術科二年 秩父 葉月

戸板女子短期大学で過ごした二年間は、高校生頃の私が想像していたよりも充実していました。新型コロナウイルスの影響で未来が見えずどうなるかわからない中、私達は入学をしました。不安の中にも新しい環境になることで、自分自身がどのように変化していくのか期待もありました。その期待通り、私を成長させてくれたのはここ戸板短大です。

高校生までは、決められた授業を受けていました。しかし、大学からは自分自身で時間割を決めることができ、受けたい授業ばかりで、毎日オンライン授業でも受けることが楽しく、確実に授業を通して知識、教養が身につけ成長しました。メイクやパーソナルカラーを勉強することで自分自身をより知ることができ、日々の生活にも役立ちました。

一年時に行ったウェディングセレモニーの授業では花嫁役でした。進行や内容などはすべてオンラインを通して、会ったことのない友達と画面上で決めました。コロナ禍でなければ、体験できないことだなと感じ

るとともに、オンラインでは感情が伝わりにくいことも実感し、思いやりの精神が大切だと感じました。

授業以外の活動では「Team」といって活動をしてきました。入学から二年間しかないので、後悔はしたくない、私にできることは挑戦するという気持ちで始めました。何事も始めは覚えることが多く、もちろん辛いこともあります。しかし、コロナ禍でも興味を持ち、オープンキャンパスに足を運んでくれる高校生や保護者の方の、不安を解消できるように全力で取り組みました。自宅に帰ってからSNSのDMでたくさんさんの質問をいただきました。自分にできることは何かを考えた時に、「といたん」として戸板の学生として、オンライン授業が当たり前になった私の日常を届けようと、毎日投稿を心掛けていました。おかげで高校生から授業以外の時間をどのように過ごしているのか、想像しやすいとお声をいただきました。

常に自分自身に何ができるのか考える習慣ができたとともに、聞く、話すコミュニケーション能力が活動を通して身についたと実感しています。また、苦手だったプレゼンテーションも高校生や保護者の方の前で何回も行い、時には急遽行うこともありました。その経験から苦手意識はなくなりました。

まだ、ここには書ききれないほど、

様々なことに挑戦をしました。二年生から始めた学園祭の実行委員の活動や二年連続で学園祭のファッションショーのモデルをしたこと。ウェディングやヘアメイク、マーケティング、編み物等、大学で学びたいことを幅広く学べたことでした。

そして、戸板で出会った同じ思いを共有し一緒に通った友達は、何かを始める時の熱量が高く、何事にも一生懸命に取り組む人たちでした。尊敬できる友達との素敵な出会いを大切にしたいと思いました。戸板女子短期大学への入学は間違っていないと、胸を張って言える二年間でした。

戸板で過ごした二年間

食物栄養科二年 澤井 ななみ

二〇二〇年四月新型コロナウイルスが流行しはじめた中、入学をしました。戸板に進学が決まった時は、ワクワクした気持ちで入学式がとても楽しみでした。しかし、コロナウイルス感染者が日に日に拡大していく世の中に、私の気持ちはワクワクから一変、学校に通うことができないのか、友達ができるのかなど不安な気持ちが大きくなりました。予想通り、全国で入学式や卒業式の中止や短縮、対面授業ではなくリモート授業の導入となり、戸板も同様に自宅から行うリモートでの授業開始とな

りました。

慣れないパソコンでのリモート授業はとても不安で、対面だったら友達と連絡先を交換し、何か分からないことがあった時連絡を取り合ったり、授業後にはご飯を食べに行くこともできたのかなと思いました。やはり、最初はなかなか友達ができなかったのですが、不安の中でも授業が進むにつれ、グループワークが増え、その話し合いの中で友達を作ることができました。友達作りに成功しても、まだ少し不安は残っていましたが、私が戸板に進学する決め手にもなった産学連携プロジェクトが始まりました。

産学連携プロジェクトでは、横浜FCさんとのコラボで女性向けの商品を作るという内容でした。私は高校時代に商品開発はおろか、パワーポイントを用いたプレゼンテーションすらしたことがありませんでした。始めはどう作ったらいいかわからなかったのですが、グループのメンバーの助けもあり、無事完成しプレゼンテーションを行うことができました。この経験からコミュニケーションの大切さやプレゼンテーションの流れなどを学ぶことができました。

夏休みが明けた頃、学校の感染対策の徹底から、クラスが半分ずつに分れての登校が可能となり、やっと対面授業を受けることができるよう

になりました。対面になってからも、授業内でのプレゼンテーションやグループワークがあり、入学してから人前での発表スキルやグループワークでのコミュニケーションスキルが鍛えられたと思います。二年間鍛えられたお陰で、相手に自分をプレゼンテーションする思いで就職活動にも取り組むことができ、無事内定も得ることができました。

入学してから二年間、栄養士になるための勉強はもちろん、社会に出ても活用するであろうプレゼンテーションやコミュニケーションを学生の内に学ぶことができ、戸板女子短期大学に入学してよかったなと思います。卒業後は社会人として、戸板で学んだことを活かして、戸板の卒業生として恥ずかしくない人生を歩んでいきたいです。



プレゼンテーション風景

インターンシップに参加して

国際コミュニケーション学科一年

南野 絢音

夏期休暇の間「ヒルトン東京お台場」でのインターンシップに参加しました。ホテルのスタッフは細かい所まで目が行き届き、テキパキと仕事をこなされているという印象でした。実際に業務に就いてみると、仕事は多岐に渡り、忙しく走りたくなくなるほどの毎日でした。

私は飲料部のレストランに配属されました。最初は仕事を覚えることに必死になりすぎて、一人ひとりのお客様に寄り添うような接客ができませんでした。しかし、日を重ねることで段々とスムーズにできる仕事が増えてきたため心に余裕が生まれ、お客様を笑顔でお迎えし接客することができました。あるお客様が私のところにわざわざ来て下さり「ありがとう」「おいしかったです」という言葉をいただけただけの時、楽しんで嬉しそうな笑顔を見た時、大変なことがあっても「また頑張ろう！」という気持ちになりました。できる限りお客様の気持ちに添えるように心掛けました。妊婦のお客様にはクッションやブランケットをお渡しして、少しでも心地よく過ごしていただくように配慮しました。

インターンシップを通して「効率よく仕事をする」「先を読んで行動

する」など、多くの事を学びました。例えば、食事の補充ばかりに時間をかけてはお客様に接する時間が減り、他のスタッフにもその分の負担が多かかっています。補充などには時間をかけず、チームワークを発揮してスタッフ間の仕事の連携の大切さを学ぶことができました。

このインターンシップ期間中は東京オリンピックと重なり、海外メディアなどのオリンピック関係者が多くホテルを訪れました。このようなお客様とは英語でのやり取りが必須でした。大学の授業などでは、ゆっくりと発音してくださることもありますが、実際の会話では英語が早口に聞こえ、理解するのに時間がかかりました。しかし簡単な英語ではありましたが、積極的にコミュニケーションを取るよう心掛け、外国の方に名前でもらえ「英語上手いね!」とお褒めの言葉をいただいた時は、とても嬉しく頑張ってお話できて良かったと思いました。そして更に英語を頑張ろうという向上心が芽生えました。

後期からは更に英語力を高めるために、大学の授業以外にも英語に触れる機会を作り、必死で勉強をしています。今はコロナ禍で海外旅行に行くことが難しい中、インターンシップを通してちょっとした海外気分が味わえました。初めて日本語で

は伝わらない外国の方とお話できたことは、貴重な体験でした。

このインターンシップは本当に有意義な時間と経験になりました。もともと内気な性格でしたが、ホテルでのインターンシップを通して、人とコミュニケーションを取ることの楽しさを感じることができました。

多くのホテルスタッフの方々が、私に「丁寧な仕事を教えてくださったからだと思います、感謝の気持ち一杯です。」

コロナ禍の中で、ホテル業界は大打撃を受けたにも関わらず「ヒルトン東京お台場」でインターンシップを受け入れてくださったことに感謝を忘れず、この経験で得た数多くの接客サービスマン、コミュニケーション力を、これからの就職活動や今後の仕事に役立てていきたいと思いません。



TOITA Fes 2021を終り

実行委員長 服飾芸術科二年 宮川 優子



私がTOITAFes 2021実行委員長に決まったのは、二〇二一年の一月です。前年度の実行委員長から推薦されました。突然のことで「なぜ私なのか」と思う半面「挑戦してみたい」という思いがすぐに込み上げてきました。そして、先輩方が残してくれた「オンライン学園祭」という形をもっと進化させたいという気持ちに日に日に強くなり、実行委員長という大役を引き受けさせていただきました。今までにないYouTube生配信と有観客開催を合わせたハイブリッド学園祭の実現を目標に掲げ、早々に活動を開始しました。

今回はEVOLUTION(進化)というテーマをもとにTOITAFesを運営致しました。戸板に入学して進化した自分を発表する場であり、TOITAFes 2021を通して一人でも多くの学生が進化して欲しいという思いが込められています。今年度のポスターを皆さんご覧いただけましたでしょうか。オレンジからピンクのグラデーションを背景にショートカットヘアの学生の横顔をメインにデザインを制作しました。あえて横顔にすることで、未来に向かって頑張っている戸板生の力強さをイメージしました。多くの学生が、ポスター配りや宣伝に力を入れたことで、当日は戸板の学生や保護者の方だけではなく、友達や地域の方にもお越しいただき、来場者は約六百名、YouTube生配信の総視聴者数は六千

名を超えました。目標を大いに上回る来場者で戸板ホールが満席になる場面もありました。

前回同様、戸板ホールにランウェイとプロによる照明を設置し、本格的なFesを目指し準備しました。音響、スポットライト、裏方はもちろん、配信用のカメラの操作、画面を切り替えるスイッチャーも全て学生が行いました。前回、プロの方たちにお願していたことを今回は私たち学生が行うため、何度もパフォーマンス団体とのリハーサルを重ねて本番に挑みました。

さらに、今回は二年ぶりに模擬店の開催ができました。学生から出店したい模擬店の企画を提案してもらい、約二十の模擬店が実現しました。コロナ禍ということもあり、開催できるか不安な時もありましたが、実行委員以外の学生も多数参加し、ずっと目標にしていたハイブリッド学園祭を実現することができたのです。

今回の実行委員は九十名で、力強く何事にも諦めずに取り組む前向きな学生がたくさんいました。だからこそハイブリッド学園祭を実現したという気持ちが強くなり、開催困難と思われていたハイブリッド学園祭が成功できたのだと思います。次年度以降も更にパワーアップし、素敵な学園祭になることを実行委員長として願っております。

このような学園祭を開催することができたのは、教職員の皆様や卒業生の皆様のサポートがあつてこそと、心より感謝しております。今後とも戸板の学生一人ひとりが輝ける場、活躍できる場として、学内最大

イベント「TOITAFes」の協力いただけましたら幸いです。最後にになりましたが、今年度も同窓会千草会、戸板父母の会から多大なご支援及びご援助を賜りましたこと、厚く御礼申しあげます。

コロナ禍で開催が心配されたTOITAFes 2021でしたが、人数が制限されたなか、十一月十四日(日)に実施されました。

千草会は四〇四号室で、栄養士会や父母の会と同室で参加いたしました。来場者は少なく、またゆっくりお話ができるスペースが取れませんでした。千草会では、総会風景、支部の活動等のパネル展示、同窓会誌で評判の良かった小野一成先生の随筆をまとめた冊子や「榮々レシビ」のチラシを作り、希望される方にお配りしました。

栄養士会では、今年度の企画として実施した「アレルギー」についてのパネルディスプレイ「スカッション」の様子、合間に当日、戸板ホールでTOITAFes 2021メインステージのYouTube配信を、映像で流しておりました。



父母の会では、卒業アルバムや学生への応援メッセージなどの活動が展示されていきました。

限られた中でも華やかでいる学生を見て、心が和む気持ちになりました。

ちぐさ編集委員会

会務報告

1 行事報告

二〇二二年(令和三年)

四月八日	役員(会長・副会長)会議、二〇二一年度 第一回常任幹事会開催について検討
四月二十五日	緊急事態宣言発出
四月二十七日	第一回常任幹事会を開催せず、常任幹 事にメールにて通知
五月十日	奨学金公募締切
五月七日	奨学生志願者Zoom面談
六月七日	奨学生選考委員会開催
六月十六日	第一回常任幹事会開催
六月二十日	二〇二〇年度決算報告、二〇二一年度 行事計画案、予算案、幹事会開催につい て、常任幹事各担当者の確認、その他
七月十二日	緊急事態宣言発出
七月十三日	事務担当者の傷害総合保険更新手続を 完了
七月十四日	会計監査
七月十五日	幹事へ書類送付
八月四日	二〇二〇年度経過報告、決算報告、会計 監査報告、二〇二一年度行事計画案、予 算案審議などの検討を依頼
八月二十日	幹事より返信葉書の整理、議案の承認
八月二十四日	二〇二一年度入学生の会費入金 経常費の予算額を三係(企画・庶務・会 計)、三委員会(ちぐさ編集・支部・奨学 金)に振込
八月二十六日	二〇二一年度奨学生六名(服・食・国)へ 奨学金の振込、支部助成金の振込
九月七日	第二回常任幹事会を開催せず、常任幹 事にメール送信

九月二十七日

TOTTA Fes 2021への参加・支援金につ
いて、事務員の時給について検討を依
頼、奨学生授与式についての経過報告
『ちぐさ』第六十六号内容検討 執筆者
選定

十月五日

『ちぐさ』第六十六号執筆依頼・発送
企画会議 TOTTA Fes 2021に向けて
の準備(展示用のパネル・パンフレッ
ト・随筆集を印刷)

十月二十八日

二〇二一年度第一回目奨学金授与式
学位記ホルダーの発注

十月二十九日

二〇二一年度第二回目奨学金授与式

十一月四日

TOTTA Fes 支援金を学生会宛に振込

十一月十一日

TOTTA Fes 2021 来校型とオンライ
ンにて開催 四〇四教室にて「同窓会
千草会の活動紹介」パネル等展示

十一月十四日

『ちぐさ』原稿締切

十一月三十日

『ちぐさ』編集会議 原稿整理

十二月三・十
十七日

新卒会員名簿の依頼

十二月二十二日

『ちぐさ』原稿を入稿

十二月二十四日

二〇二二年(令和四年)

一月~二月下旬

『ちぐさ』編集会議 校正
役員(会長・副会長)会議、今後の運営に
ついて検討

三月三日

卒業認定発表日に新卒会員名簿の住所
確認・新卒幹事選出

三月十日

『ちぐさ』第六十六号発行
『ちぐさ』編集会議 稿料、謝礼の整理
と発送

三月下旬

第二回常任幹事会
二〇二一年度経過報告、二〇二一年度
行事計画案について、その他

三月下旬

二〇二一年度決算、二〇二一年度行事
計画案(企画係)、予算案作成

三月下旬

会計係は千草会の二〇二一年度納入会
費および寄付金の整理、二〇二一年度
決算、二〇二一年度予算案書類の作成

2 二〇二二年度の役員紹介

昨年に引き続き二〇二一年度は、新型コロナウイルス
感染拡大により、行事計画も予定通り遂行することがで
きず、必要最低限度の議案の検討や行事を行うことしか
できませんでした。
二〇二二年度の行事案は、改めてホームページ上にて
お知らせいたします。

二〇二三年三月までの幹事百九十四名(留任百八十六
名、新任八名)が幹事会で承認されました。また常任幹事、
会計監査が決まりました。

会長 小林 操子(被18回)
副会長 本田 好子(生18回)
常任幹事

被服科 田村 篤子(15回) 田丸 育代(23回)
小泉きよみ(27回) 楠 香代子(29回)
古関 美和(41回) 有川美代子(42回)
生活科 永山クニ子(18回) 佐藤 良子(19回)
西山 良子(36回) 井部奈生子(46回) 佐々森典恵(45回)
井部奈生子(46回) 足立智恵子(33回) 日向 美帆(47回)

英文科 足立智恵子(33回)
服飾芸術科 有松 静(12回)

国際コミュニケーション学科 河田 知子(11回)
顧問 鈴木 静子(生4回) 多田智恵子(被33回)

会計監査 長澤 弘子(生16回)

■新幹事紹介
二〇二二年四月より新幹事になられた方を紹介いた
します。任期は二年です。

国際コミュニケーション学科 橋本 理紗子(17回)

二〇二一年三月卒業の新幹事

服飾芸術科

野口 明日香(19回)

瀬戸 鈴花(19回)

食物栄養科

斎藤 美香(20回)

米谷 彩希(20回)

国際コミュニケーション学科

播磨 姫乙(18回)

古波津 美優(18回)

大野 美智瑠(18回)

3 会計報告

二〇二一年(令和三年)の幹事会(書面審議)において、二〇二〇年度決算、二〇二一年度予算案が承認されましたので、ご報告いたします。

■奨学金について

二〇二〇年度の奨学生は、三科六名でした。各三十万円を六名に、合計百八十万円を支出いたしました。

なお、新型コロナウイルスの影響により、後期授業料の支援として各三十万円を一括支給としました。

■学生会費について

二〇二〇年度の学生会費納入者は、学生会費四百七十九名・年会費五名でした。

■雑収入について

二〇二〇年度ご寄付を二名の方より頂戴いたしました。小林千春学長

小泉きよみ様(被服科27回)

■事務費について

主にホームページのリニューアル費用として支出しました。

■学生費について

「TOITA Fes 2020」の支援金と、卒業生への記念品(学記記ホルダー)代として支出いたしました。

■予備費について

同窓会室のプリンター購入費として支出いたしました。

■会費納入について

会費納入方法が昭和五十三年三月に切り替わっています。

昭和五十二年三月以前に卒業された方は、年会費(千円)あるいは終身会費(二万円)のいずれかの納入方法を選

択することができません。この納入制度切り替え時以後未納の方には、会報誌「ちぐさ」をはじめ同窓会からのご連絡が途切れています。

会費の納入をお願いいたしますとともに、ご友人にもお伝えいただければ幸いです。また年会費の方は、既定の振替用紙でご送金ください。

なお、昭和五十三年三月以降の卒業生は終身会費で納入されており

4 同窓会事務室からのお願い

昨年三月「ちぐさ」第六十五号を皆様のお手元にお届けしてから、住所不明者として四百十九通が戻ってきました。大変残念に思っております。毎号「ちぐさ」の誌面でもお願いをしておりますが、住所変更や改姓の折には、出身科・卒業回数または卒業年・クラスなどを書いて、同窓会事務室までがき・FAX・メールでご連絡ください。お電話でのご連絡は、間違いの原因にもなりますのでお控えください。

なお、同窓会事務室の開室時間・担当者は左記の通りです。

事務室開室時間・担当者

月曜日～金曜日

午前十時～午後四時三十分

事務担当者 古閑美和(被服科41回)

住所・FAX番号

戸板女子短期大学同窓会千草会

〒105-0014 東京都港区芝二丁目二十一-十七

FAX 〇三・三四五一・四一六九(直通)

メールアドレス chigusast@toita.ac.jp

戸板女子短期大学のホームページから同窓会千草会のホームページへリンクしております。年間行事予定や行事報告などの最新ニュースを載せておりますので、是非ご覧ください。

ホームページ <https://www.toita.ac.jp/>

同窓会千草会奨学生

二〇二一年度の同窓会千草会奨学生は、コロナ禍のなか制約を受けながらも選考委員会は書類審査、Zoomでの面接を行い、服飾芸術科二名、食物栄養科三名、国際コミュニケーション学科一名の計六名を選定しました。奨学金授与式は、昨年同様学生の登校日に合わせ十月二十八日(木)と十一月四日(木)の二回に分けて、学長小林千春先生、服飾芸術科学科長小泉きよみ先生、食物栄養科学科長谷口裕信先生、国際コミュニケーション学科科長佐藤美保先生、短大事務局長中村素行様にご出席をいただき行われました。

この奨学金は、二年生を対象に学業の継続に奨学金を必要とする学生の中から、勉学の意欲に燃え、かつ人物良好な方に支給するものです。同窓会千草会は母校の発展と人物育成のために、この支援を続けています。

奨学生のお名前は、個人情報保護法により記載を差し控えてさせていただきます。

ちぐさ編集委員会からのお願い

「ちぐさ」に対する皆様の「ご意見やご要望をお聞かせください」。

学校のこんなことが知りたい、こんな記事を望んでいる、また「人物紹介」欄、「お便りコーナー」欄についても、このような方がいらつしやるなどのご紹介や情報は是非お寄せください。

編集委員会では今まで知りうる限りの方々に執筆をお願いしてきましたが、多くの同窓生がいらつしやるにも関わらず、情報が少なく苦慮しております。できるだけ多くの皆様を掲載し、「ご紹介させていただきたい」と考えております。自薦、他薦を問いませんので、よろしく願います。

ご連絡は手紙、FAX、メールなどで、同窓会事務室宛(上記記載)にお願いいたします。なお、ご自身の出身科・卒業年・連絡先も併せてお知らせください。多くのご意見や情報をお待ちしております。

松崎雅則先生

昭和五十四年四月～平成十八年三月まで二十七年間に亘り、非常勤講師として被服科で専門科目の「色彩論」「テキスタイルデザイン」をご担当くださいました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

ちぐさ編集委員一同

永眠者

○令和3年に亡くなられた方

宮川 マキ (松本)	高等師範科28回
岩崎 菊枝	高等師範科33回
熊谷 千鶴子(久保田)	新設家政科11回
柴田 瑞穂 (菊川)	被服科7回
新保 佳寿子(関本)	被服科10回
宮原 トシ子(鹿又)	生活科3回
岡 多可子(近藤)	生活科10回
○令和4年1月末までにご連絡をいただいた方	
滝川 初枝 (四条)	高等師範科25回
今村 スミ子(今村)	高等師範科29回
水島 千代子	新設家政科6回
石田 澄子 (坂本)	洋裁専攻科17回
中坪 福代 (長野)	洋裁専攻科20回

湯山 知子 (瀬戸)

新設家政科15回
洋裁専攻科21回

横山 光枝 (富田)

被服科第二部16回

後藤 真弓 (佐藤)

英文科33回

高田 栄 (桑原)

被服科6回

呉羽 道子 (田淵)

被服科12回

高師 京子

被服科30回

石田 陽子 (一ノ瀬)

被服科32回

田中 英子

被服科40回

榎本 君子 (板倉)

生活科4回

秋元 富子 (千野)

生活科13回

篠原 広子 (北沢)

生活科17回

壁谷 恵美子(小口)

生活科28回

品田 京子 (米山)

生活科28回

花岡 泰子

生活科29回

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

●正会員になられた皆様、ご卒業おめでとごさいます。今春ご卒業の皆様は、二年間コロナ禍で学生生活を過ごされました。その様な中でもハイブリッド型対面授業とオンライン授業で勉学に励み、産学連携プロジェクトに参加し、またTOITA Fesでは友達と交流を深め、今できることを精一杯取り組まれていて頼もしく感じました。この経験は今後にきっと活かされると信じております。皆様のご活躍とご健康を祈念いたします。

●この二年間生活様式は大きく変わり、社会はテレワークが主流となり、IT化が急速に進みました。教育も小学生に一人一台のタブレットが配付され、大学の授業も機器を駆使したものになりました。教職員や学生の皆さんたちの果敢な取り組み、柔軟な対応に目を見張ります。ITに疎い年代にはハードルが高く四苦八苦、今後の進化は未頼もしい若者に任せ、応援していきたいと思えます。

●今回ご寄稿いただきました食物栄養科元教授の肥後先生は、現在の生活には欠かせない電子レンジ調理のパイオニアと知り、現在職中には講義の他、学内イベント、テレビ取材など多忙な日々を送られていたことが目に浮かび、八王子校舎を知る一人として懐かしい気持ちになりました。ご活躍を心よりお祈りいたします。

●「学園だより」を読むと、インターンシップやといったんなどの経験から、コミュニケーション力の大切さを学んだ様子が良く分かります。社会人になってもきつと大きな糧となることを確信しました。

●東京近郊のオリンピック、パラリンピックが一年遅れて、更に無観客で開催されました。グローバル化した社会での百年に一度と言われるバンデミックで異例づくめだった今回のオリンピックは、新型コロナウイルスとともにずっと語られることでしょう。

●昨年の暮れに宮川マキ先生(高師二十八回)が亡くなられたとの訃報が届きました。二七〇～九〇年代にかけて八王子校舎において、非常勤講師として被服科では和裁を、生活科では和裁と手芸を担当してくださいました。学生たちへ熱心に指導する姿が懐かしく思い浮かびます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

●長年、北部九州支部の支部長などとしてご尽力くださいました、宮原トシ子様(生三回)が昨年の三月に亡くなられたとお知らせをいただきました。千草会へのご協力とご活動に感謝を申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

●今年もコロナ禍の中、諸先生方をはじめ在学生、卒業生の皆様のお力をお借りし、『ちぐさ』を無事発行することができました。感謝申し上げます。次号も頑張って編集に携わっていききたいと思います。

ちぐさ編集委員

卒業生や企業との『つながり』が戸板の新たな学びに

同窓会千草会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
教職員一同、「魅力ある戸板女子短期大学」づくりに取り組んでいます。

2021年の活動報告

学生ボランティア団体「TOITAアンバサダー」

ボランティア活動やイベントなどへの参加を通して、地域の方々との交流、学生同士のコミュニケーションの場として社会性を育てています。地域の活性化や若い世代の参加促進に取り組み、社会に貢献しています。様々な活動が制限される状況ですが、今できることに一生懸命取り組んでおります。



ABCクッキングスタジオ
「フードシェアプロジェクト」



港区立エコプラザ
「屋上緑化プロジェクト」

服飾芸術科

EDWINとの産学連携プロジェクト 「若者のデニム離れを解決」

エドウィン社からの課題に対し、若い発想を生かし様々な魅力的なアイデアで問題解決に取り組みました。新たな視点で物事をとらえる貴重な経験ができました。



食物栄養科

Cake to goとの産学連携プロジェクト 「ケーキの商品開発」

本学と連携でケーキ店をオープンした Cake to go と商品開発に取り組みました。実際に優秀3チームのケーキが商品化、販売されました。見た目、価格、製造効率などまで考える、貴重な経験ができました。



国際コミュニケーション学科

TSUTAYAとの産学連携プロジェクト 「田町駅前店のイベントを企画」

TSUTAYAと連携し、TSUTAYA田町駅前店のイベント企画の提案をさせていただきました。コロナ禍において店舗経営が難しい中、顧客目線、マーケティング等についてを学ぶ良い機会となりました。



同窓生子女入試のご案内

二親等以内に卒業生がいる方に向けた入試を実施しております。入学金の半額免除（125,000円）の奨学制度もございます。詳細は本学ホームページよりご参照ください。

ご卒業生の皆様、在学生応援のために企業連携やOG訪問にご協力ください

企業連携やOG訪問にご協力頂ける方はお気軽に下記までご連絡ください。

●お問い合わせ・お申し込み

短大事務局

TEL 03-3452-4161 (代表)

入試・広報部

TEL 03-3451-8383 (直通) 澁谷・内村
E-mail ao@toita.ac.jp

LINE
公式アカウント
でお問い合わせはこちらへ



『ちぐさ』第66号

編集 ちぐさ編集委員会
発行日 2022(令和4)年3月10日
発行者 東京都港区芝2-21-17
戸板女子短期大学同窓会
千草会
TEL/FAX
03-3452-4169(直)
E-mail
chigusa@st.toita.ac.jp
ホームページ
<http://www.toita.ac.jp/>

制作 エックスデザイン株式会社

CHIGUSA

